

た。また通常のフロアからの質問では、谷隆一郎はロゴス・キリストの道について、松崎一平は「泣く」の問題について、片山寛はロゴス・キリスト論について、桑原直己はアパテイアの涙について、それぞれ有益な質問があったことを記しておく。また課題として連続させた特別報告では、樋笠が「神の摂理」論を中心に東西教父とストア派との間の親和性について発表した。

(故中川純男先生には、病魔と闘う中、逝去される直前に序説原稿を仕上げてくださいました。心よりご冥福をお祈りいたします。)

〈序 説〉

中世哲学とストア派倫理学

中 川 純 男

われわれが初期ストア派について考えようとするとき、資料となるのはディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』、ストバイオス『抜粋集』、キケロの哲学的著作が主であり、これにプルタルコス、ガレノスが加わる。これらの資料の証言は、多くの共通性を有している。このことに注目したのはドイツの文献学者 Hermann Diels (1848-1922) である。19 世紀から 20 世紀にかけてドイツ文献学の黄金時代ともいえる時期に出版された一冊の本が、古代哲学史研究に画期的な一歩を記した。*Doxographi Graeci* (1879) と題されたこの書で、Diels は、doxographia すなわち学説誌という概念を導入した。Diels によれば学説誌の伝統は、アリストテレスの弟子テオプラストスに遡る。テオプラストスの哲学史は部分的にしか伝わらないが、この書が原型となって後にエピクロス派やストア派についての記述を追加した哲学史が書かれた。このように Diels は推測する。古代ギリシア哲学史はいずれもこの哲学史を共通の源泉として

いるため、互いに類似した内容となっていると Diels は説明する。ちなみに、学説誌の系譜については KRS¹⁾の概説がわかりやすい。もっとも KRS は、学説誌の概念を哲学説の記述だけでなく、伝記的記述、師弟関係の記述などにも拡大適用している。

学説誌 *doxographia* という名は、彼らが用いた *δόξα, ἀρέσκοντα* = *Lat. placita* という語に由来する。*δόξα, placita* という概念は彼らに独自のものであるが、学説誌のおそらくは極端な例であるディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』を見るなら、その意味は了解されるであろう。ゼノンの学説を紹介するに先立って次のように言われている。

ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』VII, 38

ストア派のすべてに共通する学説 *δόγμα* は、ゼノンの生涯の章の中で述べるのがよいとわたしは考えた。彼はこの学派の創設者だからである。そして先に記した彼の著作は数多いが、それらの中で彼は他のストア派が誰も語らなかったことを語っている。彼の学説は、一般的には次のようなものである。他の人々についてしているように、要点について語ることでよしとしよう。

ここから容易に推測されるように、ディオゲネス・ラエルティオスは、ゼノンを始め、クレアンテスやクリュシッポスの説を、いわばパッチワークのように、色とりどりの部分が縫い合わされた全体と考えている。だから共通の部分は適宜省略可能なのである。じっさいディオゲネス・ラエルティオスにおける哲学説の説明は、ひとつの区切りがひとつの話題に費やされ、区切りと区切りの内容的連関を告げる語はほとんど用いられていない。同じ現象はストバイオスにも認められる。このように、学説誌においては、それぞれの学派が特徴的な学説によって説明されている。そのため、それぞれの哲学者がどの学派に属するかの判定も容易である。Stoic あるいは Epicurean といった形容がいまでも比較的気軽に使われることの一因もここにある。

ストバイオスとディオゲネス・ラエルティオスとが異なるのは、ストバイオスがおそらくは教育的配慮から、もっぱら哲学説の羅列に徹している

1) Kirk, G. S., Raven, J. E. and Schofield, M. *The Presocratic Philosophers*, 2nd ed., 1983, (1957), pp. 4-6.

のに対し、ディオゲネス・ラエルティオスでは、生涯の記述や逸話、警句などが乱雑に盛り込まれている点である。生涯の記述も系統的なものではなく、「瘦せていた」とか、「何を好んで食べたか」、「気むずかしい性格の人であった」などに加えゴシップ風の記事、風刺的な批評など、これまたパッチワークである。学説誌には人物伝などさまざまな種類があったと思われるが、注目すべきはそれらのなかに学派の伝統、すなわち誰が誰の後継者 *διάδοχος* であったかを記述した学説誌があり、ディオゲネス・ラエルティオスもそれを利用していることである。もともと財産や家系に用いられた *διαδοχή* の語が、学説の關係に適用されたときどのような意味もっていたのかは明白ではないが、ゼノン・クレアンテス・クリュシッポスという系譜づけも学説誌家の創案と見て間違いなさであろう。このような学説誌の現存するもっとも古い例は後一世紀、地震 (AD63) とベスピオ火山の噴火 (AD79) で埋もれた町ヘルクラネウムの邸宅から炭化した形で発見されたピロデモスの著作である。

学説誌の伝統は、われわれが現在手にしているストア派についての証言に決定的な影響を及ぼしている。ストア派の見解として伝えられる説、たとえば、外的な善、身体的な善を認めず、徳のみが善であると考えた、とか、パトスをすべて知者から遠ざけた、快を認めていない、知性と感覚を区別しなかったなどは、すべて他学派との差異を強調した説明であるし、すべての罪を同等と見なしたとか、徳と悪徳との中間はないなども、他学派と比べた独自性ゆえに注目された主張である。しかし、これら学派に固有の主張の背後には学派間の共通問題があったはずである。ところがそれについての言及はほとんどない。

ストア派やエピクロス派は『使徒言行録』でパウロが議論した哲学者として名が記されていることもあり、キリスト教の時代にも関心をもたれた哲学ではあるが、彼らの哲学についての知識は、学説誌家の伝える範囲を越えてはいないと思われる。彼らの情報源となったキケロやセネカ、アウグスティヌス、あるいは十三世紀以降だとビザンティンのアリストテレス学者たちも基本的に学説誌に依拠している。それどころかブルタルコスやガレノスのように、ストア派に批判的ではあるが少なくともクリュシッポスの著作は目にしていたと思われる人々も、その着眼点は学説誌家の強い影響下にある。

しかしではストア派の思想的影響も、資料の断片的であるに応じて断片的で文脈を欠いたものであったのか。そうではないと思われる。断片的な

言葉を通してであっても、ひとつの精神が見てとられることがある。ストア哲学の影響は断片的な主張に感じられる強い精神性にあったと思われる。そのような精神性のひとつとして、われわれは極端な理性主義とでも呼ぶべき傾向を指摘できる。ここで理性主義というのは魂についての次のような主張に見てとることのできる立場である。

テミステイオス『アリストテレス「魂論」注解』107,14 (SVF I, 208)

人間の場合はこのように、パトスも論理性〔ロゴス〕に与っており、だからパトスが調整されたとき徳が生ずるのである。このことは人間の自然本性が非論理的ではなく、ただ適度を欠いているだけであることの証拠である。ゼノンを創始者とする人々が人間の魂のパトスを論理性からの離反、論理性についての誤った判断であるとしたのは間違っていない。

パトスも魂のロゴス的部分に生ずるとは、パトスも（プラトンにおけるテュモスや、アリストテレスの言うパトスのように）ロゴスとは別の行動原理ではないことを意味している。人間の行為に関することは、すべてことばによって表現でき、正しい行為は正しいことばによって、間違った行為は間違ったことばによって表現され記述される。このような主張が先にわれわれの名付けた「極端な理性主義」である。このような理性主義ないしロゴス主義が人間の行為にかぎって主張されているのではなく、むしろ自然や歴史の説明においてより大胆に適用されたことは昨日の樋笠氏の発表に示された通りである。このようなストア的精神性は、断片的なことばに触れただけのひとつにも強烈な印象を残したのではないか。
